

目白学園遺跡出土品資料室の活用

A Consideration of Cooperation Activities of the Mejirogakuen Museum and the Students

藤川 恵梨
(Fujikawa Eri)

Abstract :

In recent years, several university museums have been managed uniquely in cooperate with student volunteers and others. It becomes important to make up for each other's shortcomings of university museums and students and to evolve. By investigation of cooperation of internal university museums and students, I sorted out problems of it. From this investigation, I tried to consider what cooperation with students is possible about Mejirogakuen Museum and what profit is made.

キーワード：大学博物館 ボランティア 地域活性化 染色 むらさき
目白学園遺跡出土品資料室 中井

Keyword : Word : University Museum, Volunteer, Local Revitalization, Dyeing,
ThospermumErythrorhizon, the MejiroGakuen museum, nakai

はじめに

近年、開かれた大学の必要性が問われている。大学博物館は、資料を公開、展示することにより社会に開かれた大学の窓口として活用される可能性を持っている。創立者の顕彰、著名な教員や卒業生の紹介、あるいは記録保存の場で終わることなく、収蔵資料を活用することが重要な課題となっている。このような大学博物館の現状を踏まえたうえで、近年ボランティア等の協力を得て個性的な活動を展開する大学博物館の事例を手掛かりとして、目白学園遺跡出土品資料室の活用を探る。単なる遺跡資料の博物館としてではなく、学生の学習研究の場、地域との連携の場としての利用価値があるのではないだろうか。本学の所在する地域の文化資源

を把握し、地域連携の可能性を探るとともに新たな展示方法の検討も試みる。

1 大学博物館の現状と課題

現在、我が国には4年制大学が778校、短期大学が395校、高等専門学校が58校、合計1231校の高等教育機関が存在する⁽¹⁾。また、全国的な博物館統計によると、博物館数は4040館となっており、その中で大学博物館の総数は119館となっている。全体の約3%である⁽²⁾。内訳は、表1のように歴史54館、美術20館、総合19館、自然史10館、植物園9園、理工系5館、水族館2館の順になっている。これらのなかには学生ボランティアの協力を得て個性的な博物館活動を展開する大学博物館もみられる。

表 1 館種別 博物館法別 設置者別博物館数

区 分	登録					相当					その他					全体				
	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	合計
総 合	0	77	15	0	92	0	6	2	8	16	1	42	6	11	60	1	125	23	19	168
郷 土	0	51	4	0	55	0	7	1	0	8	1	430	21	0	452	1	488	26	0	515
美 術	0	172	206	0	378	7	31	28	18	84	2	201	235	2	440	9	404	469	20	902
歴 史	0	199	108	0	307	2	47	39	39	127	22	1,023	351	15	1,411	24	1,269	498	54	1,845
自然史	0	30	6	0	36	1	6	10	7	24	6	83	22	3	114	7	119	38	10	174
理 工	0	21	12	0	33	1	10	1	4	16	1	83	43	1	128	2	114	56	5	177
動物園	0	0	1	0	1	0	20	8	0	28	0	36	11	0	47	0	56	20	0	76
水族館	0	5	3	0	8	0	13	20	1	34	0	25	10	1	36	0	43	33	2	78
植物園	0	1	1	0	2	0	3	4	2	9	4	44	14	7	69	4	48	19	9	80
動水植	0	0	0	0	0	0	6	7	0	13	0	10	2	0	12	0	16	9	0	25
合 計	0	556	356	0	912	11	149	120	79	359	37	1,977	715	40	2,769	48	2,682	1,191	119	4,040

財団法人日本博物館協会「博物館研究」第46巻第4号（2011年4月）

2 京都大学総合博物館 ―学生発信の博物館ボランティア―

学生ボランティアの協力を得て個性的な博物館活動を展開する大学博物館として京都大学総合博物館があげられる。

京都大学総合博物館では、学術標本資料約260万点を収蔵している。その中には、国宝、重要文化財、タイプ標本、パウチャー標本が多く含まれており、研究や教育のために活用されている。これらの資料を活用し、毎週土曜日に子供向けの体験型イベント「週末子ども博物館」（図1・図2）が開催されている。講師は、現役の京都大学の大学院生が中心で、それぞれの研究分野に沿って子供たちだけではなく大人にもわかりやすく科学や歴史などの研究内容を教えている。内容は京都の植物や動物の話、歴史や

文化、化石や動物の進化についてなど多種多様。実験や工作、クイズやゲーム形式、図面図鑑を交え、実際の化石や標本に触るなど様々な方法を通して、最先端の研究を誰でも楽しく学ぶことができる仕組み作りがなされている。筆者が博物館を訪れた平成22年（2010年）6月12日も早朝にも関わらず多くの子どもで賑わっていた。講師はほぼ来館者に対して1対1で、質問や解説もじっくりと聞くことができ、大人も子供も楽しみながら、気軽に大学や研究者の雰囲気味わえる。

このイベントのきっかけを同館長の大野照文氏は以下のように述べている。「2004年の春、当時理学研究科大学院生だった小出雅文さんと情報学研究科の修士課程に入学したばかりの中川千種さんが「週末に子どもたちに標本を見せ

て大学の研究の面白さを伝えるような行動をしたい」と提案したのがきっかけで始まった。京都のさまざまな大学から文・理・芸術の広い分野の研究者、大学院生、学生が参加して、自主的に運営し、学内外の研究者の協力も得て毎週末に開催している」⁽³⁾。

京都大学総合博物館は大学博物館のなかでも最大規模であり、目白学園遺跡出土品資料室とは規模も立地条件も異なるが、学生の提案から生まれたことは、学生の自発性、自主性を活かすことの大切さを示しており、本学にも生かせるのではないだろうか。また、市民に学術標本資料を利用し研究内容を伝えることを通じて博物館の重要性を社会全体に理解してもらうことにより、大学博物館に対する理解と支援を広く市民から得ることができた事例でもあり、これからの大学博物館にとって不可欠であるだろう。「週末子ども博物館」は6年間継続して続けている。単発的ではなく継続的に学生が博物館ボランティアに参加する環境づくりが、博物館の発展さらには地域との長期的な連携を図るうえでの重要性を示している。京都大学総合博物館は、京都大学の学内共同教育研究施設として、業務による成果を、学部や研究所の研究・教育活動に提供し支援するとともに、これら諸機関の協力を得て業務内容のさらなる充実をはかっている。また、合わせて、展示や講演会等の企画を介して、一般市民に学習の機会を提供するなど、市民社会に開かれた博物館を目指し、活動を続けている。

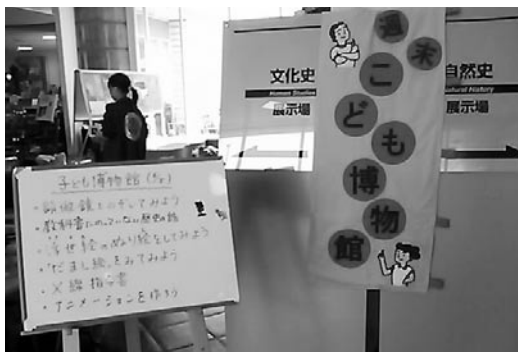


図1 週末子ども博物館—出し物のお知らせ—



図2 週末子ども博物館—浮世絵のぬり絵をしよう—

3 目白大学学生の博物館ボランティアに対する意識調査

京都大学博物館をはじめ、大学博物館での学生ボランティアの参加が広まっている。

目白学園遺跡出土品資料室の活用を巡るうえで、自発的にボランティアに参加する意思のある学生がどの程度いるのかを調査した。また、学生の目白学園遺跡出土品資料室の利用率を明らかにし、その理由を特定する。更に地域貢献に対する意識を調査することで本学学生との地域連携活動の可能性を見出す。以下、アンケートの結果について検討する。

(1) 調査票

調査票は基本属性と「大学博物館」「目白学園遺跡」「ボランティア」「地域貢献」に関する質問項目、全31の質問で構成した。回答の方法は多肢選択回答と自由回答によった。

(2) アンケート対象者と調査法

本大学の社会学部社会情報学科の専門科目「生活調査演習」「情報ネットワーク技法入門」「ネットワーク概論」「社会ネットワーク分析入門」上記4科目で担当教員の協力を得て、学生92名(男性23名 女性69名)を対象とし、集合調査法で実施した(表2参照)。

(3) アンケート実施期間

2011年9月28日から9月30日にかけて実施した。

表2 アンケート対象者

学科	性別	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
社会情報学科	男性	6	6	11	6	29
	女性	14	3	30	8	55
メディア表現学科	男性	0	0	0	0	0
	女性	0	0	5	3	8
合計		20	9	46	17	92

4 目白学園の資料室

1) 目白学園遺跡出土品資料室

目白学園遺跡出土品資料室は、昭和58年（1983年）に設立された。西武新宿線中井駅の北西、徒歩8分。目白学園構内の佐藤重遠記念館1階にある。展示面積は36.75㎡である。昭和25年（1950年）に構内で3軒の竪穴住居跡が発見され、以後調査が行われて住居跡や土器・石器が多数発掘された。

その結果、妙正寺川・神田川流域では、縄文時代中期、弥生時代後期、奈良時代にわたる拠点的な集落のひとつであったことが判明した。目白学園から中井御霊神社、落合公園にかけて広がるこれらの遺跡は「落合遺跡」として数々の文献に取り上げられているが、近隣には「目白学園遺跡」として知られている。出土品資料室ではこれらの縄文・弥生・奈良時代の遺物を約50点展示している。また、新宿区教育委員会の設定している新宿ミニ博物館としても登録されており、見学希望者に対し無料開放している。

2) ミニ博物館として

ミニ博物館には、染の里二葉苑、東京染ものがたり博物館、須賀神社三十六歌仙絵、つまみかんざし博物館、十二社熊野神社の文化財、内藤新宿太宗寺の文化財などがある⁽⁴⁾。

そして、目白学園遺跡出土品資料室は、近隣の小学校からの団体見学受入も行っており、地域の子どもの郷土学習の一助ともなっている。

3) 目白大学学生の目白学園遺跡出土品資料室の認知度

「目白学園遺跡出土品資料室」についてのアンケート調査にて、毎日通学している正門を入

ってすぐの立地にも関わらず、学生の半数以上が知らないと答え、学生の認知度が低いことが分かった。（知っている44%、知らない51%、無回答5%）（図3）

また、目白学園遺跡出土品資料室に実際に行ったことがある学生は、より少なく20%に満たないことが分かった。（行った14%、行っていない81%、無回答5%）（図4）

学外者の利用が増えているなかで、学内の学生が利用する場としての活用方法があるのではないだろうか。

目白学園遺跡を知っていますか

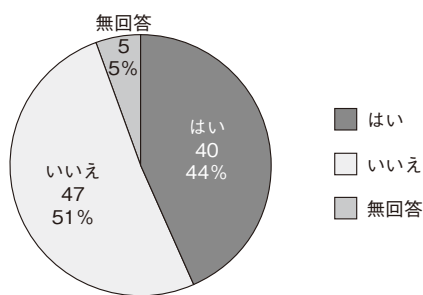


図3 目白学園遺跡認知度

目白学園遺跡出土品資料室に行ったことがありますか

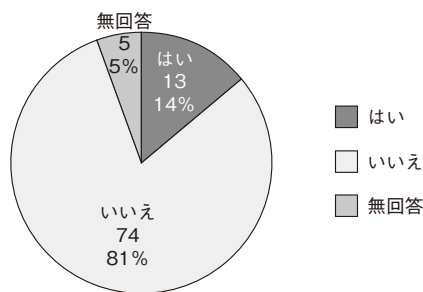


図4 目白学園遺跡出土品資料室認知度

4) 目白学園遺跡フェスタ

目白研心中学校・高等学校で「目白学園遺跡フェスタ」が毎年夏休みに開催されている。「目白学園遺跡フェスタ」の目的について、フェスタ開催に中心的な役割を果たした福井延幸氏は「目白学園遺跡資料室の見学や講演会、各種体験コーナーなどからなり周辺地域を対象に実施

することにより落合遺跡の普及・公開をはかるとともに、目白学園と地域に結びつきをより深め、地域の活性化の契機としたい。また、近隣小・中学校に対しては地域との連携を深める目的を持ち、「総合的な学習の時間」のための研修の場としてや、今後の児童・生徒の社会科見学会などに、より積極的に活用してもらおう契機としたいと考え、本企画の実施を計画した。⁽⁵⁾と記している。オリジナルな取り組みとして第一回から継続して実施されている、落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」）、勾玉づくり体験、火おこし体験、縄文クッキー教室、ガラス玉づくり体験、土器づくり体験が催されている。また、遺跡発掘調査現場公開など毎年新たな企画が実施されている。平成23年（2011年）7月31日の12回目となる遺跡フェスタでは東日本大震災を受けて「がんばろう日本!! 落合と東北とのつながり」をテーマに地域の遺跡を活用した被災地支援を含めて実施された。

目白学園遺跡の発掘成果から、古代の東北と関東の関わりを理解し、落合と震災で被害にあった東北とのかかわりを考え「絆」を深めるきっかけとなればとして始まった今年度の遺跡フェスタでの募金などは総額70,367円となり、8月1日に全額を日本赤十字社を通じて義援金として寄付した⁽⁶⁾。

遺跡フェスタの運営ボランティア参加者は、主に目白研心中学・高等学校の生徒となっている。縄文クッキー教室では、目白学園遺跡から石皿などの堅果類を粉にする道具が出土していること。また当時の気候から考えて、周辺には照葉樹林が広がっていたと考えられていることから、縄文人の食していたものを推察し、原材料検討とレシピ作成が行われた。このレシピを基に、教員指導の下、生徒主体で縄文クッキー教室が実施された。その結果について、縄文クッキー教室を主導した久保多賀子氏によれば次のような効果があったと言う。⁽⁷⁾

- 参加者と中高生のコミュニケーションが深まり互いの親密度があがった。参加者は教員に対するより気軽に様々なことが質問でき（縄文クッキーだけではなく学生生活のことな

ど）満足度も上がったようである。

- 特に小学生は、教員が教えるより中高生が教えたほうが緊張感も低く、自由な発想ができ、個性あふれる縄文クッキーの形が出現した。
- 指導した中高生に責任と自覚が生まれ、質問にも正確に答えられるようになった。参加者に対する姿勢には今まで以上に真摯な様子がかがえた。特に参加者の年齢にあわせた対応（言葉遣い・態度）ができる者が多かったことは特筆すべきことである。
- 今回のお手伝いが楽しく、次年度以降も続けたいという生徒が増えた。

この結果から、生徒がボランティアとして参加することで責任と自覚が生まれ、社会人として必要な相手の年齢に合わせた対応ができるようになり、地域連携型の社会学習になっていることがわかった。

生徒が参加することで地域に対して興味を持つきっかけとなり、遺跡を通じて歴史に対する探究心を育む契機となり、地域市民と関わり地域社会と関わることで成長の糧となりうるであろう。

目白大学からも毎年ボランティアとして学生が参加しており、年々数も増えている。しかし前述のアンケートでボランティア活動に関する質問を行った結果では、学生のボランティア活動への参加率は全体の13%（図5）に留まっており、「目白学園遺跡フェスタ」においても大学生の参加は学芸員資格取得志望者など限られた学生の参加である。まだまだ発展の余地がありそうだ。

例えば、小学生の参加が多い「目白学園遺跡フェスタ」は、将来教員を目指している学生にとって小学生と触れ合う貴重な経験になるだろう。また、縄文クッキーを製作するうえでは、製菓学科のお菓子作りの知識や技術も生かせるのではないだろうか。

「目白学園遺跡」「ボランティア」についてのアンケート調査結果の学生のボランティアに参加しない理由からも、「きっかけが得られない」「身近に団体や活動内容に関する情報がない」

が全体の71%（図6）を占めており、教員側からの情報発信によるきっかけづくりが求められている。

ボランティアに参加したことがありますか

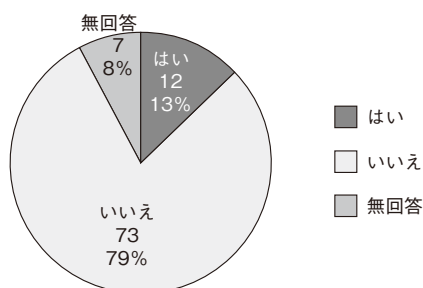


図5 ボランティア参加率

ボランティア活動に参加していない理由はなんですか

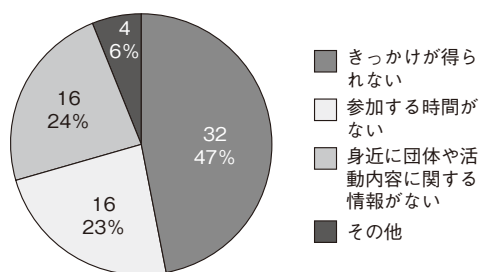


図6 ボランティアに参加していない理由

5 地域資源

1) 染の小道

目白学園のある落合・中井地域は、昭和30年代までは、神田川や妙正寺川の水を使って手書き友禅や小紋などの染物の水洗いをする染色業者が川沿いに軒を連ね、京都・金沢と並ぶ染めの三大産地として全国にその名を知られており、かつて伝統産業・伝統文化の街として賑わっていたという。いまでも落合・中井地域には、その技術を受け継ぎ、新しい染色を提案する職人・作家たちが集まっている。そのような伝統産業・伝統文化の街として落合・中井を再び日本・世界へ発信し、地域住民による伝統の共有と地域の活性化を目指して、街全体を染め物の

ギャラリーに見立てたイベント「染の小道」が企画された。2010（平成21年）年に始まり3回目を迎えた平成23年2月18日～20日の3日間は、妙正寺川に反物を架け渡し、商店街では50本を越えるのれんが店の軒先を飾るという、街全体を大きな美術館のような雰囲気に包む大がかりなイベントが展開された⁽⁸⁾。

街全体で取り組むこの企画に、筆者は2011年、社会学部地域社会学科3年の2人の学生とともにボランティアとして実行委員会の運営スタッフに参加した。さらに、学芸員資格の取得を目指す学生21名（社会学部社会情報学科、同メディア表現学科、同地域社会学科、外国語学部日本語学科、人間学部人間福祉学科の3年生）と教員もパンフレット配布などのボランティアに携わり、3日間のイベントを支援した。企画段階の打ち合わせから参加した学生は地域の方々との交流の機会を持つことで、学生にとって、日常の学生生活とは異なった責任感が生まれ、自分の意見をまとめ提案する機会ともなった。また、地域の歴史、街づくりに興味を持つきっかけともなった。今回、多くの発見があるなかで、これまでのパンフレット配布など運営部分でのサポートばかりではなく、伝統文化である「染」について深く学習することによって、より主体的に参加していけるのではないだろうか。

2) 武蔵野大学の「むらさきプロジェクト」

武蔵野大学環境学部では、「環境プロジェクト」という体験型の授業が行われている。プロジェクトテーマは「街づくり」や「環境教育を通して社会貢献する」、「環境ビジネスを生み出す」、「エコ商品の販売計画」など多岐にわたり、従来から行われているプロジェクトに参加する場合やこだわりのテーマを持つ学生は独自のテーマを立ち上げることもできる。テーマが学外と連携するような場合には、必要に応じて学外（産・官・民）と連携する。

それぞれの学生はテーマごとにチームになっているが、メンバーはこれらのテーマの中で2カ月から3か月くらいの企画（時限テーマ）を考えて、実行する。その過程をPDCAサイクル

(Plan,DC,Check,Act)で報告しながら、スパイラルアップをめざし、最長で2年半継続する(2011年からは最長で2年間となっている)。このように継続することのメリットは、夏休みなど長期の休暇も活動することができることにある。

授業時間には報告や連絡等が行われ、活動は授業時間外となることが多いが、その活動・運営はあくまで学生の自主性にまかされている⁽⁹⁾。

これらのプロジェクトのひとつに、本稿の目白学園遺跡出土品資料室と地域連携、学生のボランティア活動に生かすことができる可能性のある活動があったので、以下に紹介する。

プロジェクト名は「むらさきプロジェクト」である。

「むらさき」とは、紅花と共に三大染料として古代から珍重されてきた。その原料である紫草は「むらさき科」に分類され、その科には次の22種がある。

えぞむらさき	わすれなぐさ	ちしゃのき
むらさき	いぬむらさき	まるばちしゃのき
ほたるかずら	さわりりそう	すなびきそう
みずたびらこ	たちかめばそう	きゅうりぐさ
つるかめばそう	はまべんけいそう	ひれはりそう
るりそう	やまりりそう	おおはりそう
おおりりそう	おにるりそう	
みやまむらさき	はないばな	

このうち「おおりりそう」と「るりそう」は、その根から紫色の染料を得るとされるが、特に鮮麗な紫の色素を得ることができるのは「むらさき」だけである。

江戸時代には「むらさき」を使った「江戸紫」の染物が流行し、武蔵野の多くの農家で栽培され一帯が「むらさき」の名産地になったといわれている。この地にはむらさき橋、むらさき通りなど「むらさき」の名を残している場所が多く存在し、古今和歌集にも詠まれている⁽¹⁰⁾。

しかし、明治時代以降は合成染料の登場により商品価値を失い、「むらさき」自体も絶滅危惧種に指定されるまでになってしまった。

この「むらさき」を武蔵野大学環境学部の一学生が、環境側面からは絶滅危惧種の復活・再生、地域文化的には「むらさき」の染料としてのアピールを目的にプロジェクトテーマとして取り組んだ。このプロジェクトは2007年に始まり、2010年に終了しているが、「むらさき」の種の入手、種の特定、栽培方法のノウハウの聞き取り、栽培、収穫、根から染料の成分としてのシコニンの抽出、そして染料製造という息の長いプロジェクトであったという。

6 地域資源を活用した地域連携の可能性と新たな展示方法の検討

1) 目白大学むらさきプロジェクト提案

前述のように「むらさき」が栽培されていた地域は広範囲であり、本学の所在する落合の地にも含まれる。そこでこの「むらさき」プロジェクトを本学の学生が引き継ぎ保護地として名乗りを上げ、さらに伝統工芸に生かすことが考えられる。

まず、栽培であるが、「むらさき」はプランターでの栽培が可能であり、武蔵野大学の栽培記録(表3)でわかるように学生にも可能である。

つぎに武蔵野の地で行われていた染色業であるが、その歴史は、今から300年前、多摩郡松庵(現在の杉並区松庵辺り)の杉田仙蔵という豪農が武蔵野の紫草復活を思いたち、奥州南部に出向いて栽培や染色法を習得し、武蔵野での「むらさき(紫草)」栽培に成功し、井の頭池の水を用いて鮮やかなむらさき染めを完成させたという⁽¹¹⁾。武蔵野の湧水を用いた染色業の伝統は妙正寺側流域に広まり、目白学園のある中井地区に定着し今日に至っているのである。

そして、本学の近郊の染工房と連帯し、学生が育てた「むらさき」の根を使った染物を制作していくこともできよう。そして、「染の小道」の催事との連帯も考えられるのである。

「むらさき」栽培が、江戸文化の再現に繋がり「染の小道」の名物にもなりうるであろう。地域資源を生かした江戸文化の再現を通じて、地域の歴史に触れることをきっかけに、学生の学習研究の場となるであろう。

主 な 活 動 記 録	
07/11	準 備 開 始
08/01	活 動 開 始 (ブ ログ 開 設)
08/02/26	薬 用 植 物 園
08/03/08	みたか紫草復活プロジェクト
08/03/21	栽 培 開 始 (種 ま き)
08/07/15	環 境 イ ベ ン ト & シ ン ポ ジ ウ ム
08/11	紫 根 分 析 (実 験 1-2, 成 果 報 告)
09/01/06	染 め 物 実 験
09/03/12	移 植
09/07/14	環 境 プ ロ 中 間 報 告 会
09/10/22	紫 根 染 め
10/03/30	栽 培 終 了 ・ 片 付 け 完 了

表3 むらさき活動記録

2) 目白大学学生の地域資源の認知度

「ボランティア」「地域貢献」についてのアンケート調査では、中井地区が染の街として栄えていたことを知らない学生の割合が80%以上（知っている9%、知らない88%、無回答3%）（図7）と地域の伝統産業に対する認知度が低いことがわかった。また、「染の小道」についても、知らない学生の割合が90%以上（知っている7%、知らない90%、無回答3%）（図8）と、2011年2月で第3回目とまだ始まってから日が浅いこともあるためか、認知度が低くなっている。

但し、地域貢献に携わるボランティアに参加してみたいと思っている学生が半数以上おり（参加したい51%、参加したくない46%、無回答3%）（図9）今後の地域との連携が期待できる。

3) 成長する企画展提案

従来の目白学園遺跡出土品資料室の展示は出土品を展示する常設展であった。施設規模の問題もあるが、固定的な展示に留めることなく、学中井が染の街として栄えていたことを知ってい

すか

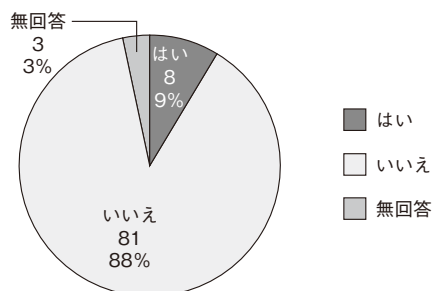


図7 染の街「中井」の認知度

「染の小道」を知っていますか

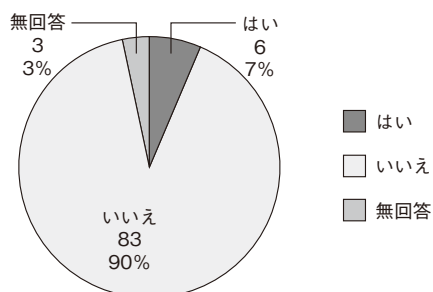


図8 「染の小道」認知度

地域貢献に携わるボランティアに参加してみたいと思いますか

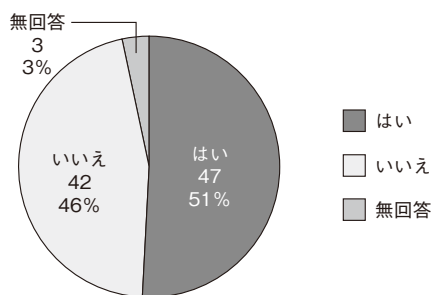


図9 地域貢献ボランティア

生の学習研究の成果による企画展を加えることで、施設をうまく使った新たな企画展示の場にしてはどうだろうか。

前述の「むらさき」を利用した例で考えると、第一展示「むらさきの栽培過程」第二展示「むらさきの染過程」第三展示「「染の小道」との地域連携を図り作品の展示」と各段階に分けた展

示を行っていく。学生活動が変化していくなかで、その過程を展示にて公開していく。学生の活動に合わせて資料室展示も成長する新しい展示の方法を取り入れることで企画展示の可能性が広がるのではないだろうか(図10)。

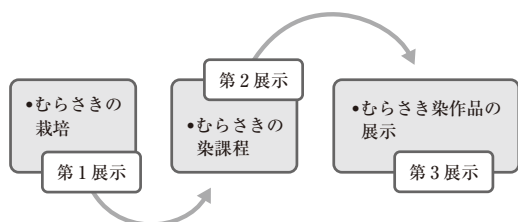


図10 成長する展示（むらさきを例）

おわりに

以上のように、目白学園遺跡出土品資料室の活用を探るなかで、単なる遺跡資料室としてではなく、学生の学習研究の場、地域との連携の場として活用の可能性があることを指摘した。地域の特色も取り入れた企画展示活動を行っていくことで、目白学園遺跡出土品資料室へ足を運ぶことのなかった地域の人や1度訪れたきりで再来のきっかけがなかった人に利用してもらえる機会となる。目白学園遺跡出土品資料室の認知度も高まるであろう。大学の博物館、資料室はモノの展示と研究に終わりがねない一般の博物館に比べて、学生という資源を有しており、「人々をつなげる」要素を秘めているのである。

【註】

- (1) 文部科学省 平成22年度学校基本調査報告書による
- (2) 財団法人日本博物館協会「平成21年度博物館園数統計」(「博物館研究」第46巻第4号 2011年4月)
- (3) 大野照文「大学博物館における社会連携－京都大学総合博物館を例に－」(日本古生物学会「化石」通号83 2008年3月)
- (4) 新宿ミニ博物館とは、新宿区教育委員会が新宿歴史博物館を拠点として、区内の文化財や史跡、伝統産業を担っている職人さんの仕事場などを博物館として位置づけ、普及を図っている事業。

- (5) 福井延幸「目白学園遺跡フェスタの取り組み－地域文化の核となる学校をめざして－」(「目白大学短期大学部研究紀要」44号 2008年1月)
- (6) 目白研心遺跡フェスタ http://www.mejiro.ac.jp/mk/news/2011/110731_i.html
- (7) 久保多賀子「目白遺跡フェスタにおける縄文クッキーの導入－小学生に対応したレシピと指導方法の試み－」(「目白大学短期大学部研究紀要」45号 2008年12月)
- (8) 染の小道－新宿区落合・中井 <http://www.somenokomichi.com/>
- (9) 武蔵野大学環境プロジェクト <http://mufes.jp/>
- (10) 玉川上水に掛かるむらさき橋には次のような説明板が設置されている。

「むらさき橋の由来

この橋は、三鷹市と武蔵野市を結ぶ都市計画街路の一部として、両市により昭和三十年十一月に建設されました。現在の橋は、平成十年三月に、旧橋の老朽化に伴い架替えられたものです。橋名は、旧橋完成の際に両市民の公募により、応募総数594通の中から選定されました。

橋名のいわれは、「古今和歌集」より

紫の ひろもとゆへに 武蔵野の

草はみながらあはれとぞ見る

巻第十七 雑歌上 よみ人しらず

とあるように、昔このあたり一面に咲きほこっていた、紫草で染めあげた「むらさき染」にちなんで命名されたものです。」

- (11) 竹内淳子『紫（むらさき）－紫草から貝紫まで－』(2009年10月 法政大学出版会)

【謝辞】

京都大学総合研究博物館の取組に関して、同館長の大野照文氏、及び角井氏に御教示を得た。

また、武蔵野大学環境学部で行われている環境プロジェクトに関しては同学部教授矢内秋生氏、同大学卒業生、澤田氏から御教示を得た。

目白大学教授の宮田学氏の授業内にてアンケートのご協力を得た。

この紙面を借りてお礼を申し上げます。